

山里の歴史と文化を伝える熊本県山都町の清和文楽

文楽の里づくりと清和文楽館の建設

熊本県上益城郡山都町（かみましきぐん・やまとちょう）は、九州の中央部、阿蘇の南側に位置する人口 1 万 5 千人の町である。熊本市から東へ車で 1 時間半、旧藩時代に日向往還とよばれた古道は宮崎県高千穂・延岡に通じている。農林業を主産業とする集落が山あいになんて点にあり、高所の冷涼な気候を生かした有機農法による野菜・果樹栽培が盛んである。

山都町は 2005 年に矢部町、清和村、蘇陽町が合併して発足した。それぞれに独自の地域文化が根付いており、広大な自然環境と文化財をどのように保全しながら活用していくか、人口減少の厳しい現実のなかで地域の活性化が大きな課題となっている。

旧清和村の大川集落には江戸後期嘉永年間（1848-1854）に淡路の人形芝居一座が巡業に訪れ、村人が人形を譲り受けて操り方を習い、祭りなどで上演する山里の文化が根付いていた。明治期に一度衰退したが、昭和天皇即位を祝う行事で復活し、戦後 1950 年代に保存活動が盛んとなり、1956 年に清和文楽人形芝居保存会が発足して現在にいたっている。村人たちが「株」と称して保有していた人形の頭は 50 体あまり、保存会の座員も 30 人近く集まり、農業のかたわら地元の春秋の祭り、近隣の農村舞台や神社で人形芝居を上演した。

1960 年に 2 人の人形技術者が熊本県から無形文化財に指定され、1979 年には清和文楽が熊本県重要無形文化財に指定された。この頃から清和文楽の文化的価値を認識し、継承していくことが行政レベルでも重要な関心事となった。清和村「文楽の里」づくりをめざす構想が 1980 年代から 90 年代にかけて具体化し、文楽まつりなどの催しも開始された。

1980 年代に細川護熙県知事のもとで熊本県が推進した「くまもとアートポリス」プロジェクトでは「熊本らしい田園文化圏の創造」をめざし、建築・環境デザインによって地域文化の振興をおこなった。そのひとつとして清和文楽がとりあげられ、斬新な組み木（騎馬戦組み手工法）による文楽専用舞台をもつホール（200 席）が建設された。また熊本県立劇場の鈴木健二館長が県内各地の地域文化を掘り起こし、清和文楽の支援をおこなった。1992 年には清和文楽館が完成し、保存会が所有していた人形と衣装は村の文化財として整備された。

さらに併設された物産館（道の駅）と山上の天文台をあわせて財団法人清和文楽の里協会が設立されて運営が委託された。文楽の邑とよばれる広大な空間と美しい建築群が観光振興の呼び水となり、九州・全国各地からの企画旅行・グループ旅行の観光客に対して、年間 200 回以上の有料公演がおこなわれ、3 万人が観劇するという活況が生み出されたのである。1993 年 10 月には地元の大川阿蘇神社の農村舞台で薪文楽も開催されるようになった。文楽弁当を食しながら幻想的な舞台を観るという趣向のこの催しには、毎年多くの観光客が来訪している。

晩秋の山里での上演から伝わる継承への情熱

2015 年 11 月の最後の日曜日、文楽館の定期公演で「壺坂霊験記 山の段」（つばさかれいげんき やまのだん）が上演された。晩秋の寒さが身にしみる季節で、観客は十数名であったが、竹本友清太夫（佐藤義和さん）の三味線の弾き語りは、凜と張り詰めて盲目の夫と懸命にお参りする妻の悲哀を物語って涙をさそった。そして、身を投げた 2 人が観世音菩薩に救われる最後の場面での人形遣いの操りは躍動的で、一気に喜びの情感が伝わってくるような舞台であった。

清和文楽はほの暗い農村舞台で演じられていたため、人形の所作が大きく素朴であることが特徴であるとされ、その技法が教本で伝えられている。

文楽館が建設されて以降、一番の課題となってきたことは、長く途絶えていた太夫・三味線を復活することであった。当初は録音テープによっていたが、財団が職員を淡路人形座に 2 年間研修に派遣して太夫を養成し、現在は佐藤さんが太夫をつとめている。

一方、人形遣いは財団職員 1 人を除くと退職者や農家の方々と、60 代、70 代が中心である。保存会会長の松田信雄さんは、役場退職後 12 年間人形遣いとして活動してきた。「主遣いは 10 年、15 年ではだめ、永遠に卒業しない」と探究心旺盛である。最高齢で 77 歳の河田知栄子さんは「先輩の芸を学んで絶やさないようにしたい。先輩に追いつこうと思う」と前向きである。伝統を受け継ぐ保存会の一体感と先輩に続こうとする思いが清和文楽を支えてきたことがわかる。

山里の中で熟成してきた清和文楽は、海外公演でも大きな感動をよんでいる。今までにアイルランド、イタリア、韓国、ギリシャに招かれて上演した。2000 年には小泉八雲生誕 150 年にちなんでアイルランドで新作「ムジナ」を上演し、それをもとに 2002 年に「雪女」をオリジナル作品として制作したことは、清和文楽の美しさに磨きをかけることとなった。今年も 12 月から 3 月まで「雪女」が定期公演の外題となっている。

ふるさとの文化を次世代につなぐ

毎週日曜日の定期公演（12 月～3 月は月 2 回）と百回以上に及ぶ旅行グループの予約公演をこなすことは並大抵のことではない。保存会のメンバーは現在 10 人に減少しており、2000 年代前半ごろまで発展をみた文楽の里づくりは、現在後継者をどう見出すか、壁にぶつかっている。ここで財団は、職員 3 人を 2 年間淡路人形座の研修に派遣して文楽を継承していくという思い切った選択をした。「ひたすら芸を続ける」と決意している太夫の佐藤さんと保存会会長松田さんを中心に、この春に帰郷する 3 人の若手職員（太夫 2 人、人形遣い 1 人）を加えて清和文楽の保存・継承にむけた新たな段階がスタートする。

伝統芸能を次世代につなぐということで、10 年ほど前から地元の清和小学校の総合的な学習の時間に、太夫と人形遣いがでかけて文楽の指導が行われてきた。6 年生が太夫・三味線・人形遣いを分担して上演し、下級生が観劇する。教育委員会も 2014 年度から文楽講座

として淡路から人形遣いを招き、清和小・中学校の児童生徒に夏休み 3 日間の講習をおこなっている。先輩を超えたいという下級生の意欲が高まり、"くまもと子ども芸術祭 2015 in 菊池"では清和中学の文楽公演が高い評価を受け、子どもたちにとって大きな自信となった。ふるさとを次世代につないでいくために地域住民がどう関わるか、全地区で自治振興の検討が始まり、清和地区大川でも農村舞台の活用などによる地元のあらたな模索がおこなわれつつある。

<写真> 清和文楽定期公演「壺坂靈験記 山の段」(清和文楽館提供)

